

年間第7主日 マタイ 5:38~48

マタイ福音書5~7章は山上の説教で、今日の朗読もその中にあるイエス様のお話です。内容は、命令形で書かれていますが「守れたらいい」「守れなかったら駄目」と額面通りに受け取らない方がいいと私は思っています。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」とても難しい「ゆるし」がテーマです。聖書のみ言葉を説明しても実現が難しいので、別の2点から考えてみました。

1つ目は、映画『沈黙』からです。『沈黙』にキチジロウが登場します。何度も何度も転びました。信仰を捨てるシンボル、踏み絵を踏みました。宣教師のロドリゴをお金で売ってしまうのでイスカリオテのユダを想像させます。ただ、ユダと違うのは、何度裏切っても、また司祭にゆるしを求めてきます。良心の呵責を感じたら神様の元に戻ってきます。ユダが決定的に神様から離れてしまったのに対して、キチジロウはまた戻ってきます。「こんなに裏切ってありえない！」と腹立たしくなりますが、神様にまた戻ろうとする態度は見習うべきでしょう。「私は神様からゆるしを受ける資格がない」と思ったら神様からどんどん離れてしまうからです。神様は、人生の最後の最後まで、私たちをゆるそう、愛そうとしてくださっています。神様の親心を感じ取りましょう。

では、裏切られた共同体はどうだったのでしょうか？ 映画では描かれていませんでしたが、密告者が出て、切り捨てたわけではないようです。神様のゆるしと本人の回心のために祈っていました。ただでさえ厳しい生活に加えて、断食して犠牲を捧げたり、ロザリオの祈りをしていました。「やられたら、やり返す」のではなく、裏切った家族にも優しく関わり、生活を支えていたようです。潜伏キリシタンの時代の共同体のゆるしが私たちにヒントを与えてくれます。

2つ目は、ベトナム人の禅僧（臨済宗）でティックナット・ハン(1926.10.11 生まれ)という人です。現代の仏教界でダライ・ラマ 14世と並ぶ世界的靈的指導者で、平和のために行動した人です。彼は、ベトナム戦争の時に両国に戦争反対を訴え、フランスに亡命した。1982年に南フランスにプラムヴィレッジ・瞑想センターを作って世界中に平和を訴えかけています。アメリカのキング牧師にも影響を与えたと言われています。彼は、「敵を愛することは無理だ。しかし、無理だから何もしなくていいというわけではなくて、愛する前に敵のことを理解したらどうか？ 急に愛そうとするから難しいので、まず敵を理解するところから出発したらいい。」と言います。彼は「敵を愛すること」を「レタスを育てること」になぞらえます。家庭菜園でレタスを作って、上手くできないことがあります。上手く出来なかったら、理由を考えます。日当たりか？ 水か？ 肥料が足りなかったのか？ その原因を探します。これを応用して、うまくいかない人をレタスとして考えたらいい、と言います。できそこないのレタスに「なんでお前、うまく育たなかったか！ 何てダメなレタスなんだ！」と責める人はいません。そうではなくて、「どうしてダメだったのか？」と育てる人が考えます。わたしたちが敵だと見る人も、レタス、しかもできそこないのレタスだと考えてみる。理解しようとする姿勢から、いろいろなものが解けてきます。「あれは、そういうことか！」となってわかってきます。その人を受け入れる方法が見えてきます。(この内容は「神との親しさを深めるために 一祈りを身につける」キリスト教出版局 日本 FEBC 英隆一朗神父 21.許すこと・先ず理解することから始めよう を参考にしています)

2つの考え方は、難しい人間関係で悩んでいる時の参考です。他にも色々方法はあるでしょう。「神の国」のために、努力していきましょう